

高校野球における特待生制度に関する考察

A study of scholarship at baseball club in high school

1K05B070

指導教員 主査 宮内孝知先生

菊地 倫太郎

副査 作野誠一先生

【1. 研究の動機・目的・方法】

2007 年高校野球特待生問題が浮上した。プロ野球チーム西武ライオンズの学生に対する裏金提供問題に端を発し、高校野球部の特待生制度がクローズアップされて世間を騒がせた。筆者も高校時代硬式野球部に所属しており、非常に関心の高い出来事であった。そこで、2007 年に浮上した特待生問題について検証し、何故高校野球の特待生制度が禁止されてきたのかを明らかにし、高校野球における特待制度の是非を筆者なりに結論付けたいというのが本研究の動機とその目的である。研究方法は主に当時の関連記事、高校野球に関連する文献を考察の材料として行った。

【2. 各章の要約】

第 1 章では、裏金提供問題から特待生問題に発展するまでの経緯、財団法人日本高等学校野球連盟(以下「高野連」という)の対応を追った。日本学生野球憲章第 13 条で野球部員であることを理由とした特待生は禁止されてきたが、結果として高野連は容認するところになった。第 3 節では高野連によって新たに制定された特待生制度のガイドラインについて言及した。

第 2 章では、特待生制度の実態を検証した。2008 年から高野連が行った特待生制度の実態調査によると、2009 年に特待生を採用予定とした高校は 431 校だった。また、この校名発表を基に第 81 回選抜高校野球大会、第 91 回全国高校野球選手権大会の出場校を比較し、特待生制度がどの程度甲子園出場に効果があるのかを検

証した。そして、これまでに高野連は特待生制度をどのように扱ってきたのかを明らかにした。その結果「特待生制度は未成年の高校選手を野球偏重の生活に導きかねない」というのが最大の理由であった。

第 3 章では、高校野球の前段階である少年野球に関して検証を行った。少年野球関係者は幅広い人脈を持っている。当然高校にもパイプが存在し、毎年多くの硬式野球経験者が特待生として採用されていく。また、高校野球特待生問題有識者会議議事録や文献の調査により、プロカーが高校進学を斡旋をしていることも明らかにした。中学生が商品のように扱われ、ビジネスの対象となっている。

第 4 章は各章を総括し、高野連の示したガイドラインや制定の経緯を参考にして結論を述べた。ここではガイドラインにより起こり得る影響についても検討を行った。筆者は中学生の学校選択の自由と進学先の選択肢を増やすことから、高校野球の特待生制度自体には賛成である。ガイドラインについても概ね賛成ではあるが、学業の基準を入学段階だけでなく入学後にも設けることや、野球の能力に秀でていることを第一条件とせず、「学業優秀」「品行方正」を第一条件とすることなどを提言した。これにより、「野球偏重の生活」や「他の模範」となる生徒の育成につながるのではないかと考えた。また、プロカーを少年野球、高校野球から排除するために、入学試験の行い方や特待生と確定する時期についても筆者の意見を提示した。この問題の出発点には、日本学生野球憲章の認知度、高

校のモラルの低さがあった。高野連には、ガイドラインを示すだけでなく憲章の普及にも尽力してもらいたい。各都道府県高野連を通じて講習会を開くなど方法はあるはずだ。また、高校側には公開性、透明性ある特待生制度の運用を期待する。高校野球は高校生自身のものであり、その高校生が大人の利害関係や組織の腐敗により野球に集中できなくなるようなことはあってはならない。